

2017年日系ブラジル研修

テーマ：地域保健医療福祉－既存の社会資源を要介護高齢者へ活かす手法

研修目標：日本の地域における要介護高齢者へのケア及びシステムについて学び、自国の高齢者ケアの改善に資する。

期間：2018年11月5日～12月6日

研修員数：8名（内訳：医師3名、看護師2名、自治体職員（心理療法士）1名、社会福祉士1名、ヘルスコンサルタント1名）

ブラジルの歴史的背景

日本人の移民開始から110年が経過した南米諸国では、日系人の高齢化が進み、日本と同様に高齢者への支援が課題となっています。高齢化率(60歳以上)は、サンパウロ州13.19%で、日本の割合の半分であるものの、増える高齢者を社会全体で支えるための制度や取り組みがないブラジル国等では、個人や団体等が個別でできる範囲の対応にとどまっています。

現地日系社会の現状／問題等

問題点として以下の点が挙げられます。

- 1) 高齢者の保健福祉について標準化した社会制度が確立されていない。
- 2) 高齢者対策は国の重点課題として取り上げられておらず、高齢者政策は一部の活動に留まっている。たとえば、元気な高齢者向けの健康増進・生きがい支援プログラムは充実し、また寝たきり高齢者への訪問医療は一部実施されている。しかしその中間の状態である、日常生活や外出に一部の介助を要する高齢者向けのサービスは存在しない。
- 3) 日系老人ホームは経営難に陥っており、組織の黒字部門からの補てんや、キリスト教関係者等からの寄付によりなんとか経営を続けている状態がある。
- 4) 老人ホームの介護スタッフは、非日系人の無資格・無経験者が多く、日常的な介助（おむつ交換、着替え、入浴等）の知識、技術が不十分なまま介護が行われている。また、老人ホームや元気な高齢者向けのプログラムには、医師、理学療法士、臨床心理士等、日本よりもはるかに多種類の専門職種が従事しているが、職種間の連携が乏しく、専門性が発揮されにくい状況にある。
- 5) 南米では高齢者の保健医療福祉の専門職にも「認知症ケア」については経験の少ない分野であり、実践・体験による研修が急務となっている。
- 6) 点在する日系高齢者が共助により生活を自立する支援（たとえば送迎サービス付きの介護予防プログラム、高齢者向けの寄り合い住宅）が必要である。

上記のような点から、本邦研修には日系を中心に受け入れるものの、問題解決のためには、高齢者支援は、日系人だけを対象としていては基本的な状況の改善に結びつかない恐れがある。

期待される成果（習得する技術）：

1. 日本の高齢者対策の歴史的背景と現状を理解し、自国の高齢者対策と比較できる。
2. 自治体、地域における高齢者ケアへの取り組みを理解し、自国と比較できる。
3. 自国の強みを列挙できる。
4. 高齢者施設の運営、管理について理解する。

5. 高齢者用住宅の利便性について理解する。
6. 高齢者に残されている力を使うケアについて理解し、応用できることを計画する。
7. 地域医療（訪問医療・看護・リハビリ・介護等の包括的な展開）について理解する。
8. 介護予防技術について理解する。

研修施設：東京研修—講義・見学（財）健和会医療グループ、東京都健康長寿医療センター
佐久市、および周辺地域での研修—佐久市、佐久大学、JA 長野厚生連佐久総合病院、
JA 佐久浅間星の里デイケアプログラム（訪問介護）、JA 新子田の家（グループホーム）、
ライオンハート・リハビリテーション、東御市、ジェーエー長野ローマンうえだ。

アクションプラン：具体的な活動

1. 介護人材を増やすために、地域のボランティアへ研修を行う。
2. 3年計画で「認知症高齢者」を受け入れる施設の整備、介護者への研修を行う。
3. 地域のシェルター6か所のうち、2か所で高齢者対象のデイケアプログラムを提供する。
4. 介護者の腰痛を軽減するため、介護器材の使用を施設内で標準化する。
（スライディング・シート、スライディング・ボード、床式リフト等）
5. 日系の高齢者用にお風呂の設置を考える、また、現在、毎日シャワーを浴びているが、
高齢者の皮膚は乾燥しやすいため、シャワーの回数を減らすことを検討する。
6. 巡回診療の合間に健康増進運動（体操、脳トレーニング等）を行う。
7. 日系関係の組織が協力して活動できるように働きかける。
8. 現地に派遣されている日本のシニアボランティアの知見を有効活用し、
デイケアプログラムに活かす。

所見

研修員は、全ての講義、見学に熱心に取り組み日本人としてのルーツ、アイデンティティを
確認しつつブラジル社会との融合性を測ろうとしているような姿勢が見られました。佐久総
合病院・小海分院での「グリーンケア—故人を偲ぶ会」への参加、および訪問診療、訪問看
護・介護を通して、患者・家族と直接触れ合い、感動に涙する場面もありました。講義を通
して知識やシステムを学び、見学を通してやり方を見学ぶ、自らできる限り体験してみるな
ど有益な研修となりました。研修員は、帰国後、リーダーとして活動していくことになりま
す。

12/5, 最終評価会では、次年度に向けプログラムの改善点が協議されました。また、研修受
け入れ先、講師、関係者のみなさまのご指導、暖かい歓迎、おもてなしに対し、研修員から
深謝のことばがありました。

2018年1月9日